



| | |
|------------------|---|
| Title | 殷墟をめぐる日中関係：近代日本と民国学術史（一） |
| Author(s) | 吉開, 将人 |
| Citation | 北海道大学文学研究科紀要, 137, 1(右)-31(右) |
| Issue Date | 2012-07-25 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/49813 |
| Type | bulletin (article) |
| File Information | 2_YOSHIKAI.pdf |



[Instructions for use](#)

殷墟をめぐる日中関係——近代日本と民国学術史(二)——

吉 開 将 人

はじめに

一、研究動向と問題の所在

二、近代日本学術界と殷墟問題

(1) 東京帝国大学

(2) 京都帝国大学

(3) 大正日本の「殷墟ブーム」——東京と京都のあいだ

(4) パトロンの誕生——侯爵細川護立

(5) 小結

三、殷墟発掘へと至る道

(1) 林・諸橋からの伏流——パトロン細川侯爵と外交官瀬川浅之進

〔以上、本篇〕

〔以下、続篇〕

殷墟をめぐる日中関係

- (2)「対支文化事業」と殷墟発掘構想
 - (3)「東亜考古学会」と「東方考古学協会」
 - (4)北京学術界における「親日」派の優勢
- 四、風向きの変化——中国考古学をめぐる国際環境
- (1)多国間競争の中の考古事業
 - (2)国際共同調査の摩擦と風評
 - (3)東方考古学協会と殷墟発掘計画
 - (4)日中間の摩擦と計画の頓挫
- 五、史語所の興起と東方考古学協会——馬衡・董作賓と傅斯年
- 六、東方考古学協会の夢と挫折——殷墟の代替としての燕下都
- 七、まとめ
- 八、余論——誤伝としての東京帝大「殷墟発掘」説

はじめに

中国には膨大な歴史文献が文化遺産として残されてきたが、近代を迎え、それら「国粹」への関心が一時的に弱まっ

た。それを再び価値あるものとして中国社会に広く示す役割を果たしたのは、清末から中華民国（以下「民国」）期にかけての数々の考古学的発見であった。ところが今日において、歴史を塗り替えたことに注目する議論は盛んだが、それらの発見がなされて成果として評価が確定するまでに、いかなる展開と背景とがあり、そこにどのような思想や制度が作用したのか、という点に注目する者は数少ない。西欧近代において進化論を背景に形成された考古学という近代学術が、進化論とは異なる歴史思想を正統とし続けていた中国社会に、いかにして受容され、中国特有の文化的脈絡の中に位置付けを与えられ、独自の成果を上げたのか。その過程には、近代中国を取り巻いた様々な歴史的事象が影響を及ぼしており、それは民国史を研究する上で一つの重要な切り口となる。

考古学の中国社会への影響を見る上で、最も興味深い事例は、卜辞（以下「甲骨文」）を刻んだ甲骨（以下「殷墟甲骨」）の発見と、その出土地としての殷墟遺跡（以下「殷墟」）発掘をめぐる展開である。河南省安陽の殷墟は、今日、殷墟甲骨の出土地、そして古代殷王朝の都城址として名高い。甲骨文の存在自体が注意されたのは一八九九年（一八九八年）のことである。しかし、安陽で初めて中国人研究者の手で発掘が行なわれるまでには、さらに長い歳月が必要であった。中華民国国立アカデミーの中央研究院歴史語言研究所（以下「史語所」）によって、この地に鍬が入られたのは、甲骨文の「発見」から三十年を経た、一九二八年のことである。史語所の中国人研究者たちは、この時、いかなる契機で殷墟発掘に着手したのであろうか。

殷墟甲骨発見以後の近代学術史において、中国の隣国である日本の学術界は、明治・大正・昭和を通じて、殷墟と甲骨文の研究の発展に多大な役割を果たしてきた。これについては、殷墟甲骨の明治日本への最初の伝来以後、東京の林泰輔らによっていち早く着手された研究、あるいは来日した清朝金石学の大家羅振玉とその門生王国維、さらに

郭沫若と日本学術界との交流など、おもに甲骨学の分野の成果として国内外に広く知られている点である。しかし、殷墟そのものに対し、近代日本の学術界がどのような関心を向けていたのか、とりわけ日本の考古学者と殷墟との関係性については、「学派」「学閥」的穿鑿が先行し、また一面的評価としての「日本人として初めて」云々、あるいは短絡的理解と誤伝の繰り返しによる「帝国主義」「略奪」説ばかりが突出するなど、国内外において、その実態が十分に理解されているとはいえない状況にある。

実のところ、甲骨学と同様に考古学の分野でも、近代日本の学術界は中国学術界と深い関係を持ち、その発展に一定の影響を及ぼした。そして少なくとも殷墟について言うなら、ある意味、日本の学術界が、一九二八年の史語所による発掘を促し、研究の方向性を決定づけたといっても過言ではないのである。以下において、これについて論じていくことにしたい。

一、研究動向と問題の所在

近年、中国の歴史学界では、旧来の「革命史観」の見直しが進み、北京政府や南京国民政府時期の各種施政を再評価する動きが顕著なものとなっておりつつある。考古学をめぐる学術史研究も、その例外ではない。

かつては一九四九年に始まる考古学研究・事業展開の前史として、アンダーソン (Anderson, Johan Gunnar)・鳥居龍蔵など、日本人を含む外国人研究者の調査・研究は、その否定的側面が専ら強調され、清朝以前の金石学を語るのと同じ程度の紙幅しか与えられず、一九四九年以後へと接続する成果・功績として評価されることはなかった。ま

た中国人研究者の成果としても、民国国立アカデミーの史語所に属し、蒋介石とともに台湾に渡った研究者の業績、とりわけ彼らが主導した初期の殷墟発掘については、実際の当事者ではなく、遅れて殷墟発掘に参加し、大陸に残った人々によって、偏った史料にもとづいて歴史的経緯や背景が語られ、学術史的評価がなされてきたのである。^①

これに対して、最初に異議申し立てをし、民国学術史上の殷墟発掘という新たな問題提起を試み、初期の殷墟発掘に対する評価の見直しを、学術思想史を軸に「中国近代学術史」研究の立場から行なったのは、台湾人研究者たちであった。彼らは、現在台湾の台北郊外に置かれる中央研究院所蔵の第一級の同時代史料群（史語所檔案、傅斯年檔案）を整理し、その公開へと弾みをつけた当事者であり、それらにもとづいて多くの重要な問題提起を行なったのである。^②一九九〇年代以後、民国期史料の公開が進み、海外の近代史研究者の関心が台湾に向かう中、やがて日本の研究者によって、これら初期の殷墟発掘に関係する史料の存在が、日中関係史と日本学術史、もしくは中国学術史の材料として注目されるに至る。^③そして、台湾海峡をはさむ中台交流が盛んになる中、目下、中国人研究者の参入が進み、積極的にそれらの史料の利用が試みられ、研究成果が次々と発表される状況となりつつある。^④

一方で、このように台湾の史料群を軸として展開した「中国近代学術史」研究からの動きとは別に、考古学そのものの分野においても、一九四九年以前の発掘成果や研究蓄積を再評価し、今日的な諸問題への伏流を歴史的に跡付けようとする研究が、一九九〇年代後半以後、おもに欧米への留学経験を持つ、若手の中国人考古学者たちによって盛んとなってきた。^⑤中国学術界に、それ以前において一九四九年以前の「中国考古学史」についての研究がなかったわけではないが、それらは基本的に、大事記もしくは通史概説的性質のものであった。この種の論著は今も量産されているが、^⑥一九九〇年代後半以後、新たな世代を引き付け、導いたのは、これらとは一線を画す、欧米人研究者による

「中国考古学史」の書き直しの動きであり、また近年の欧米考古学界で一つの流行となつてゐる、「ポスト近代」的関心にもとづく「考古思想史」研究の潮流であつた。⁸⁾

一九九〇年代の中国では、これとほぼ同時期に、「史学史」もしくは「史学思想史」研究の一領域として、「中国近代学術史」の関心から、「中国考古学史」に注目し、その再検討を進める動きも現れてきた。⁹⁾これらは、上述の台湾における「中国近代学術史」研究の新たな展開と軌を一にするものだが、両者の交流が盛んとなり、中国学術界で台湾の史料群（史語所檔案・傅斯年檔案）が重視され始めるのは、二一世紀に入つて以後のことである。¹⁰⁾

近年の中国国内では、台湾の史料群への関心の高まりの中で、「中国考古学史」の材料としてそれらを利用し、史語所による一九四九年以前の学術的成果だけを論じた業績も現れている。¹¹⁾ところが扱う史料は同じでも、先の欧米留学組の中国人研究者たちによる近年の「中国考古学史」の書き直しの動きと同様、考古学史の空白を埋めるという問題設定が顕著であり、台湾・中国双方の上記学術史研究の成果とは、有機的な結び付きを認めることができない。中国の考古学界に近年現れたこれらの動きは、民国期の考古学的成果の再評価という結果は同じでも、問題設定および成果としては、学術史的関心によつて行なわれてゐる議論とまったく別物なのである。

さらに、日本国内では「日本考古学史」の相対化を目指して、「帝国」時代の戦前日本の「外地」での考古学史の掘り起こしも進んでいる。こうした研究は、戦前に「外地」で考古学事業に実際に従事した当事者の手によつて、実は比較的早くから着手され、日本の外交史料館に眠る同時代の関係史料の発見が成果として成し遂げられていた。¹²⁾それが近年改めて、研究領域としても史料としても再評価され、いくつかの重要な成果が生み出されるに至つたのである。¹³⁾それらの議論の中には、本論文で主題とする殷墟を含め、中国大陸でかつて日本人研究者たちが行なつた「中国考古

学史」あるいは「中国近代学術史」に関わる事象も含まれている。ところが議論はあくまでも「日本考古学史」の延長としてのみ行なわれ、台湾・中国学術界における上記の近年の展開が、問題の所在とともに、これらの日本人研究者によって意識されている様子は見られない。

同様なことは、甲骨学の分野にも当てはまる。例えば近年日本では、新たな史料の発見により、「日本甲骨学史」の書き換えが進んでいるが、そこにおいても「中国近代学術史」あるいは「中国考古学史」の分野における上記の展開が意識されている様子は見られず、「日本人として初めて」が重視される、考証もしくは概説の域を出ないのである。

そして何よりも残念なことは、これら「日本考古学史」「日本甲骨学史」の新たな成果が、上記の「中国近代学術史」あるいは「中国考古学史」の新たな研究の中で、全く参照される様子が見られないという点である。例えば、「建築史」の分野では、日本に留学した中国人研究者によって、「日本考古学史」の新たな研究成果が吸収され、近代日中学術交流史についての優れた業績が中国語でまとめられて、すでに中国国内で公刊されている¹⁶⁾。ところがこれに対し、史語所による一九四九年以前の考古学的成果を主題とした最も近刊の中国人研究者の著作の中では、それに関係する当時の日本人研究者たちの動向がまったく注意されず、以上で挙げた日本人・中国人研究者による近年の日本での関連する研究成果の利用も確認できないのである。

以上複数の研究の方向性が、同じ対象を見ながら、それぞれ交流がないまま、ほとんど孤立した状態で並行展開していることを、見て取ることができよう。

筆者は、香港で在外研究をした一九九六年以後、「中国近代学術史」研究に足を踏み入れ、民国期の考古学・文物事業史の見直しをテーマの一つとして、これまでいくつかの成果を発表してきた¹⁸⁾。二〇〇六年には、上で述べた内外の

研究動向を鑑み、先行研究が抱える問題の克服を目指して、台湾の史料群と日本の外交史料館文書を総合的に活用し、「帝国」日本の学知としての近代考古学を、中国近代史との関連に目を向けながら、「日本近代史」の文脈で論じた。¹⁹⁾ また二〇〇七年には、それと同じ趣旨を、「中国近代史」の文脈に置き換えて台湾の論文集に中国語で発表した。²⁰⁾ しかし、「中国近代学術史」の新たな研究成果を咀嚼し、台湾・日本・中国に残された同時代史料を中心に、あえて考古学に焦点を当て、「中国考古学史」「日本考古学史」でもなく、「中国近代学術史」を論じようとする筆者の手法と問題意識が理解されるきっかけとはならなかった。その後、二〇〇八年に台湾の史語所で開催された「殷墟発掘八十周年」シンポジウムという恰好の場で、改めて中国語圏に向けて成果を発表する機会を得たが、開催から四年近く経てもその論文集は公刊される気配はない。また、史語所で殷墟発掘を主導した所長傅斯年を記念し、二〇一〇年に山東で開催されたシンポジウムでも、再度中国語圏に向けて成果の発表を試みたが、先日届いた公刊論文集には、提出原稿でなく、会議の口頭報告用の草稿が取り違えて掲載されていて、遺憾にたえない結果となっている。²¹⁾ 一方で、筆者がかつて台湾で苦勞して解説・筆写した史料の多くが、最近公刊された傅斯年の書信集に、改めて解説・活字化を経て収録され、²²⁾ 今や誰でも研究に参入しようと思えば可能な有様である。不本意にも世に出ることのないままに置かれた拙論と論旨の繰り返しになるのを憚らず、急ぎ日本語で本論文を再構成した理由は、以上の経緯にある。読者の御理解を乞いたい。

二、近代日本学術界と殷墟問題

日本人は、いかにして殷墟と出会ったのか。殷墟発掘へと至る道を明らかにするために、まずは近代日本の学術動向とその実態について論じておかねばならない。

殷墟甲骨が日本に初めてもたらされたのは、一九〇九年初め頃と推測される⁽²⁴⁾。しかし当時の日本の歴史学界は、なおも西欧起源の近代史学を唱喩中であつて、折悪しくも「史料批判」を振りかざして上古史にメスを入れようとする「疑古」の論調が、日本・朝鮮・中国史の分野で、大きな流行を見せていた。そのため殷墟甲骨が日本に伝来するやいなや、ただちにそれは甲骨文の真偽論争へと発展したのである。

(1) 東京帝国大学

近代日本の学術界にあつて、疑古論者の代表格は東京帝国大学（以下「東京帝大」）の東洋史学者白鳥庫吉であり、折しも殷墟甲骨日本伝来の年、一九〇九年の六月に初めて発表された、中国上古史に対するその疑古学説は、「堯舜禹抹殺論」として広く知られている⁽²⁵⁾。白鳥は、中国前近代を通じて儒家の理想とされてきた上古の堯舜禹「三代」の実在性を、史料批判に立つ近代歴史学的手法により、完全に否定しようとしたのである。

白鳥の疑古思想は、当時とりわけ東京在住の東洋学者たちの間で、強い影響力を持った。とくに東京帝大の多くの学者は、基本的にみな甲骨文の信頼性に疑問を抱くこととなり、一九三〇年代に至っても、当時まさに史語所の中国

人考古学者たちによつて発掘がなされていた殷墟遺跡そのものに対し、疑いの目が向けられたのである。東京帝大の中国史学者和田清は、一九三六年に出版した中国通史の自著の中で以下のように述べる。

支那の上代の歴史は今日未だ明かでない。上代の支那は青銅器の發達の著しい国であるが、その上限が何時であるかもまだ判然としない。……支那上代の伝説には三皇五帝等の伝へもあるが、いずれも陰陽五行や天文道德の説に仮托せられた物語であつて、固より史実ではない。夏王朝のことはこれを信ずる人もあるが、その本拠の地がどこであつたかさへも異説があつて、或は之を山東とし、或は河南とし、或は山西として一定しない。次ぎの殷のことは所謂殷虚^{〔イマ〕}の遺蹟の發現によつて、頗る信ぜられてゐるが、まだ大分怪しい所が多く、確なことは解りかねる。……支那の歴史がやや信憑出来るのは、その後〔周の〕平王の時、所謂周室の東遷があつて後のことである。(和田清『岩波講座 東洋思潮 支那(上)』一九三六年)

東京帝大の考古学者原田淑人も、一九三五年に開催された考古学の座談会で、以下のような発言をしている。

森本〔六爾〕「彩色土器と高型土器の關係はどうなりますか。原田〔淑人〕「僕は甘肅省と云ふ所は、例へば漢の時代、唐の時代、色々な民族が寄り合つて雑居して居つた。そこで色々な文化があそこに入つて来た。西の方の文化も早くから彼処に来て居ると思ふ。それらがあそこで一緒になつたのだらうと思ふ。……三上〔次男〕「殷墟はどうでせう。……原田「殷墟の骨の文字だつて、僕は、詰りあの亀卜一つで決めるのはいけないと思ふ。字體なんて云ふものは、精密に調べて、初めて古い新しいが決められるものだと思ふ。江上〔波夫〕「殊にああ云ふものは特殊のものですから、古い字を使ひたがるものであり、又始終それに依つてやつて居るのだらうと思ひますから、普通のものゝ字が違ふからと言つて、必ずしも古いとは言へない」。原田「どうも彼処の文字も新しい

ものがあるのぢやないかと思ひますね」。(原田淑人ほか「東亜考古学の座談会」一九三五年)⁽²⁷⁾

原田の助手であった東京帝大の考古学者駒井和愛もまた、一九三五年に発表した論文で、以下のように述べる。

中央研究院〔史語所〕は、李濟博士の指導の下に大規模な調査発掘を遂行して……殷虚^{〔イフシ〕}を以つて支那青銅器時代の初期の遺蹟であり、殷代の都址であると云ふことを宣伝するに至つたのである。しかしながら、翻つて考へて観ると、安陽県小屯の附近を「殷虚」に比定することに就いては、文献学上何等確固たる証拠があるわけではないのであつて、若し殷虚と云ふ称呼の爲に、此の地が支那最古の文明の遺址であると云ふ様に考へられたものとすれば、それは凡そ意味の無いことである。又此の地から出土する遺品であるがために、青銅器としては古式に属するものであると観られ、従つてこれ等の青銅製遺品を以つて、支那の金石併用時代乃至は青銅器時代初期に属するものと認めがちなることも甚だしく軽率であると云はざるを得ないのである。……「殷虚」の示す文化が必ずしも周以前代に属してゐて、考古学上の金石併用時代の初期に当ると云ふことを主張するの要を認めないと断じ得るのである。序を以つて云へば、……支那の青銅器時代の勾兵、斧斤等が支那民族の石器から進展したもので無くして他からの影響に基くものであること、従つて青銅と云ふ合金を造る技術も之れを外から習得したものであらうと解さなくてはならないのである。(駒井和愛「殷虚文化私考」一九三六年)⁽²⁸⁾

これらのような殷墟甲骨ないし殷墟に対する懷疑論は、東京では第二次大戦末期まで続いた。一九四三年、京都の東方文化研究所(現京都大学人文科学研究所)の甲骨学者貝塚(小川)茂樹が上京し、東京帝大で甲骨文についての研究成果を講演した時の印象について、当時、東京の東方文化学院(現東京大学東洋文化研究所に部分継承)の中国史学者西嶋定生は、以下のように回顧する。

昭和十八（一九四三）年ごろのこと、当時わたくしが在職していた東京の東方文化学院と、京都の東方文化研究所との交換講演会が、東京大学文学部の教室を借りて開催されたとき、その年の東方文化研究所の代表として、そのときはまだ小川姓であった貝塚（茂樹）さんが、甲骨文による殷の歴史（「支那古代世界の成立」）を講演された……。わたくしは、会場の一隅で、はじめて聞かされる甲骨文の話を、ただものめずらしく受取っていたにすぎ……なかつた。当時東京には、甲骨文が殷代の遺物であることに疑いをもつひとがあつた。わたくしはこの講演のあとで、そのころ東京大学文学部の東洋史学科の主任教授であつた和田清先生が、この講演を聞いた感想として、「これで甲骨文が殷代の遺物であることを認めないわけにはいなくなつた」と洩らされたことを記憶している。（西嶋定生「貝塚さんとその著作集」一九七八年）⁽²⁹⁾

西嶋の回顧によれば、和田は貝塚の成果に接して、ついに白鳥以来の殷墟甲骨をめぐる懐疑論に終止符を打つたというのである。事実、和田はそれから間もなくして、殷ではなく、殷の前の夏王朝の実在性を主張する研究へと向かつて⁽³⁰⁾いる。

以上概観したように、殷墟と日本学術界との出会いは明治末年にまで遡るものの、当時の疑古思潮の影響は、東京においては実に一九四〇年代まで存続した。そして原田と駒井の発言と論述からは、それが中国文明の起源を中原そのものではなく、今日の中国の外、西方に求めようとする潜在意識と結び付いたものであつたことが読み取れる。駒井はそれをさらに、殷墟で発掘される文物を「金石併用時代」の産物と見るべきか、それとも「青銅器時代」の産物と見るべきかという、考古学的時期区分をめぐる問題と結び付いたのである。

彼らのこうした考え方については、近代東洋学の分野で世界的に流行を見せた、十九世紀後半の東洋学者ラクペリー

(Lacouperie, Terrien de) 学説に代表される「漢族（中国文明）西来」説、すなわち漢民族そのものと漢字などの中国文明の諸要素は、中国大陸内部に自生したのではなく、西アジア（もしくは中央アジア）の地に起源して、「黄帝」以後はじめて中国に移住・伝来したものにほかならないとする学説との関連において、理解すべきである。実は、曆法をめぐる議論に見るように、白鳥の「堯舜禹抹殺論」そのものが、「漢族（中国文明）西来」説と密接な関係を持っている学説であった。⁽³²⁾ それにもかかわらず、この「堯舜禹抹殺論」はその珍奇さのあまり、後世においては単純に東京・京都の「学派」「学閥」論に還元されて理解されることが多かったのである。この原田と駒井の発言と論述に見るように、当時の東京帝大を中心とする殷墟甲骨ないし殷墟に対する懐疑論は、単純な真偽論争というよりも、近代日本⁽³³⁾の中国文明観（起源論）と関連付けて論じられなければならない問題であると言える。

(2) 京都帝国大学

こうした東京の「東洋学」者たちと対照をなすのは、京都の「支那学」者たちの殷墟甲骨・殷墟への関心のあり方である。京都には、東京と同じく明治末年に殷墟甲骨がもたらされ、学術的関心が向けられた。⁽³⁴⁾ しかしその直後に、清末の混乱を避けて来日した羅振玉・王国維を迎えた京都では、東京と異なり、真偽論争へと展開を見ることがなかったのである。

まずは、前節で東京について見たものと同時期の、京都における中国上古史、文明観を、京都帝国大学（以下「京都帝大」）の中国史学者内藤湖南（虎次郎）が一九一七年に発表した文章に見てみよう。

殷墟の遺物を標準として、古書の解剖に従事して、漸く支那文化の根原がおぼろげながら明かになるのである。

殷墟の遺物によりて、『尚書（書經）』の「虞夏書又は洪範などの真偽竄乱を調べて見たならば、必ず發明する所が多い筈である。若し一層遡つた時代、即ち殷墟以上の古蹟が発見されたならば、一層信憑するに足る文化史の源泉を釋ねることが出来て、支那研究は一層進歩するであらう。今殷墟の遺物で見れば、その多くは石器、骨器の類であるが、多少銅器が出て居る、それ故支那の文化史ははまだ銅器時代から以上を見ることが出来ないが、此際銅器の全く出ない古蹟が発見されるれば、支那文化の起源が幾千年前にあるか、或は何時代に当るかを研究し得るのであるが、遺憾ながら未だ発見されない。けれども、何処かにさう云ふ古蹟の存在することは疑ふべからざる所で、其の場所も大体どの地方と云ふことが解つて居るから、何時かは発掘し得ることと信ずる。（内藤虎次郎「支那古典学の研究法に就きて」一九一七年）

内藤は、殷墟から説き起こして、さらにそれよりも「一層遡つた時代、即ち殷墟以上の古蹟」「銅器の全く出ない古蹟」について言及する。「支那文化の源泉」は、西方ではなく中国国内の黄河流域にあるものとして、彼は疑つていなかったのである。⁽³⁶⁾ 彼らの殷墟に対する根本的な関心の由来はここにある。それが、白鳥庫吉たち東京帝大の東洋学者たちとの決定的な相違を生んだのである。

この論文には、以下の記述も見られる。

支那を解釈するには、支那人が是迄積み上げた事業と云ふ者を十分に研究して見なければならぬ。……予は其の立場として、支那民族発展の跡を釋ねて、その文化を判別し、之を理解する為めの古典学研究について、茲に自己の経験から得た方法を説明してみようと思ふ。……金文の研究が盛になつてからは、それに拠つて経文に疑問を挟む人も出来たのである。けれども、この派の学問はまだ十分に盛大を極むべき運に向つて居ないが、近来

殷墟の発掘によりて其の遺物から推して、新しい研究法を発見し、それを經学の準拠とする人が出る様になつた。これもまだ十分ではないが、併し大体に於いて、従来研究法の發達から考へて、その歸著すべき場所が明かに解る様になつた。即ち従来の研究を概括すれば、……今後進むべき道は、先秦古典の研究から、金文、殷墟の遺物の研究に進むであらうといふことが明かである。この方法を以て新しい研究法を組み立てたならば、始めて支那古典学と云ふ者が、所謂科学的に進歩し得る者と思ふ。(内藤「支那古典学の研究法に就きて」一九一七年)³⁷⁾

是の如き研究法は勿論一朝一夕には出来ないのみならず、如何に聡明な人でも、一人や二人の手で出来ることでないが、要するに、研究の方法も定めず、単に部分的の考証を事として居ては、いつまでたつても、信用するに足る結論を得ることが出来ない。殊に今日は清人の如く經書を限界として、それ以上に疑問を挟むものを罪惡とする様な考へが必要でない。尤も方針のない研究法で、妄りに古書を疑ふのでは何等の利益もないが、少なくとも以上の様な方針を立てて進んで行くならば、研究に多少の確実味を加へ得ると信ずる。然う云ふ方法にして始めて支那古典学の基礎が立ち、古代史の研究も出来るのである。これ等の事業は今日に於いては、支那の学者よりも寧ろ日本の学者が着手する方が、自由な便宜があると思ふので、余は同志の人々とさう云ふ方向に進んで行きたいと思ふのである。(内藤「支那古典学の研究法に就きて」一九一七年)³⁸⁾

ここには、内藤に代表される京都帝大の「支那学」者たちが、「支那古典学」に役立て得るものとして、いまだ正式な発掘の鉤が入れられていない殷墟に、いち早く注目し、将来の日本主導の組織的研究事業について思いをめぐらせていた様子を見て取ることができる。

實際、内藤たちはこれに先立つて、すでにそれに向けた行動を起こしつつあった。東京帝大で西洋美術史を学んだ

濱田耕作を抜擢し、京都帝大に日本の大学で初めて考古学研究室を設け、来たるべき中国大陆での発掘に向けて、美術考古から「支那学」の世界に興味を向けさせる努力を重ねたのである。⁽³⁹⁾

内藤が濱田に掘らせたかった遺跡の一つが殷墟であったことは、内藤のこの一文から見ても、疑う余地がない。

(3) 大正日本の「殷墟ブーム」——東京と京都のあいだ

以上において、東京帝大と京都帝大との間で、殷墟と殷墟甲骨をめぐる異なる態度が認められたことについて確認した。両者が立場と関心の違いこそあれ、歩調をそろえ、共同して殷墟発掘の実現へと動き出すのは、後述するよう一九二五年以後のことである。そこに至るまでの間に、両者の間にあつて、来たるべき殷墟発掘への伏線を用意した人物は、東京高等師範学校（現筑波大学に部分継承）で教鞭を執る林泰輔であつた。

東京帝大の前身である東京大学で古典講習科漢書課に学んだ林は、東京帝大を疑古思潮一色へと導いた白鳥庫吉よりも一世代前の学者であり、近世以来の学風を残す明治の漢学者である。⁽⁴¹⁾ これに対して白鳥は、明治日本へのドイツ近代史学の紹介者たる「お雇い外国人」のリース (Reiss, Ludwig) に師事し、「伝統的漢学から「史」を切り離し、「東洋史」として近代東洋学の中に新たに位置付ける試みを推進し、西欧近代史学の手法によって上古史にメスを入れようとした。⁽⁴²⁾ 両者の活動時期はある程度重なるが、その学術的位置付けは対照的であり、それは殷墟甲骨と殷墟に対する姿勢についてもあてはまる。林は東京にありながら、白鳥に代表される「疑古」に与しなかつたのである。

林は一九〇九年の初め頃に、日本に将来された殷墟甲骨に接するや、直ちにその歴史的価値を確信し、同年八月に日本で最初の殷墟甲骨についての学術論文となる「清国河南省湯陰県発見の亀甲牛骨に就きて」を發表する。⁽⁴³⁾ そして、

それに続き一九一一年に発表した論文の中で、白鳥の中国上古史論、すなわち「堯舜禹抹殺論」に対し、以下のよう
に批判したのである。

明治四十二(一九〇九)年、白鳥博士は、東洋協会に於て支那古伝説の研究といへる題目を以て講演せられ……
たり。今その説の大意を約言するに、堯舜禹の三王は、漢民族の理想を人格化したるものにて、史的实在の人物
にあらざ……とせり。……周代以前に於て、いかなる時代の存せしかといふに、唐といひ虞といひ夏といひ殷と
いふものありしことは、『尚書』その他『左伝』、『史記』等の諸書の伝ふる所なり。而してこの説の然否を確かめ
んとせば、書籍以外の实物に就て研究するより善きはなし。……近來古銅器以外に於て有力なる証拠物件の発見
せらるるものあり、それは清の光緒二十五年(明治三十二(一八九九)年)河南省にて発見せられたる亀甲獸骨に
文字を雕刻せしもの〔殷墟甲骨〕是なり。(林泰輔「堯舜禹の抹殺論に就て」一九一一年)⁽⁴⁾

彼は殷墟甲骨の価値を認め、その存在によつて白鳥の「疑古」に批判を加えようとしたのである。以後、林は日本
に將來された殷墟甲骨の調査をもとに、一連の成果を発表し、日本の甲骨学の礎を築く。しかし、これについてはす
でに広く知られた事実であるので、その詳細にはここでは立ち入らず、林がその後、殷墟を实地に訪問した点をめぐつ
て、いくつかの新たな事実について論じたいと思う。

林は、一九一九年に「殷墟の遺物研究に就て」と題する論文を発表し、その中で自ら殷墟を訪ねて得た新たな知見
について、以下のように紹介している。

私は昨(一九一八)年四月五月の頃に六十日余支那を旅行致して参りましたが……唯だ其中で一箇所日本人の
参りませぬ所へ参つたのが、即ち河南省の安陽でございます。此安陽が所謂殷墟と称する所でございます……

支那を旅行するに就ては是非亀甲獣骨（殷墟甲骨）の出た所を一遍訪ねたいと云ふ考がありました。今度参りました時分に其処を訪ねたのであります。（林泰輔「殷墟の遺物研究に就て」一九一九年）⁽⁴⁵⁾

広く知られるように、この林による一九一八年の殷墟訪問は、日本人研究者による最初のものであった。ところが、近年明らかにされたように、⁽⁴⁶⁾ 実のところこの殷墟訪問は、林の単独行でもなければ、彼自らがその契機を獲得したものでなかった。東京高等師範学校の同僚で、『大漢和辞典』の編著で知られる漢学者諸橋轍次が、故竹添進一郎（丹々）の関係で、財閥三井家から中国旅行の資金を与えられた際、年長者の林の意向を汲み、諸橋が同行を認めたものであり、殷墟もまた二人そろって訪問したものでしたのである。⁽⁴⁷⁾

不思議なことに今まで紹介された例を知らないのだが、この一九一八年の二人の殷墟訪問については、諸橋の紀行文に以下のような詳細な記述が存在する。

午（大正七年＝一九一八年）四月……二十八日……八時頃にはもう彰徳へ着いた。……間もなく安陽へ出掛けた。一里足らずの道ではあるが、高低軌軌幾度、馬車の苦しさは十分に味はつた。広々として畑に出た。漸々たる麦秀を外には見るものもない。此が今から三千年の前、殷の河亶甲王の都した河亶甲城の地である。宋の時代に此の地から発掘せられた陶器の上の文字と、近年此の地から掘出される亀甲獣骨の文字とが、著しく一致してゐるといふのが、そもその始めて、殷の都は山東の奄（衰）から此の処に移つたものだらうとの説が盛になつて、好事家、研究家が頻りに此の地を調査する。西人の獣骨を掘出したといふ畑は、南・西・北の三面は涇水に囲まれて、面積から曰つたなら方一町もあらう。深さは地下六尺から十二尺までであるさうだ。漸々たる麦秀の中、今もその獣骨、亀甲の片われが拾はれる。僕も二三片は拾つて来たが、格別のものではない。日は暑い、

風は砂を吹いて来る。再びもとの道を辿つて宿に帰つた。午後は町へ出て、骨董屋などを冷かしたが、大したのもなかつた。(諸橋轍次「旅枕」一九三八年)⁽⁴⁸⁾

先の林と一文と同様、諸橋の文章にも同行者は登場しない。しかしこの時、二人が中国大陸で行動を共にし、安陽(彰徳)の殷墟訪問も林の希望によるものであったことは、諸橋の別の証言によつて裏付けられる。

大正七(一九一八)年、……上海で王国維……などを訪ねて、それから長江を遡り、京漢線(鉄道)に出たのであるが、その時浩卿(林泰輔)は、ぜひとも安陽の踏査をやりたい、と言ひ出した。……この時は(安陽)県知事などの配慮によつて、無事に行つては来たが、何分当時は土匪も多かつたので、僅か一日その地を踏査した、というに過ぎなかつた。(諸橋轍次「漢学界の回顧」一九五四年)⁽⁴⁹⁾

この後、諸橋は翌一九一九年八月から一九二二年八月まで、二年間の中国留学を文部省から命じられ、北京へと旅立つ。⁽⁵⁰⁾注目されるのは、彼が留学から帰国までに、さらに二度にわたつて殷墟行を試みたという事実である。

再度の安陽探査は大正十年である。西(大正十年)一九二一年……四月……(二十五日)三時半彰徳につく。

……目指す亀板骨片の出づるは小米屯児(小屯?)、及び段家屯児なり。前者は彰徳の西北四五支里にあり、後者は東北二十支里にありと云ふ。目今後者には尤も匪類多く、前者は午前中ならば、多分匪類の襲来もなかるべしと云ふ。……四月二十六日、……(安陽県)知事羅榮褒氏を訪ふ。……小米屯、段家屯の近況を訪へば、共に土匪多くして行く能はずと云ふ。他日土匪静まるを待ちて再び来らば、其の地の発掘を允さるるや否やを問へば、其は各界の賛成を待たざる可からずと云ふ。各界とは何人と問へば黙して答へず、暗に排日学生の一群を指すもの如し。更に課長陳登瀛に問ふに、若し土地を借り受け徐々に発掘せば如何と問へば、其等は地主との相談事な

殷墟をめぐる日中關係

り、衙門と無關係なりと云ふ。蓋し暗黙の間に黙認せるものの如し。……七月十五日、……彰徳に向ふ。……日知張定遠君停車場に在り、万事大いに好都合なり。直ちに南大街路西の〔棉業〕試験分場長張四羅氏寓に至る。聞けば羅〔榮褒〕知事・陳〔登瀛〕課長共に転任せりとか、発掘の先約空しくなりたれば失望せざるを得ず。亀骨の多くの場所より分出するは水流の為ならずと云ふ。或は然らん。今も尚土匪多くして該地に行かん事危険なれば明年（一九二二年）を期しては如何、明年迄には張氏等発掘の模様を詳記し、一尺下は如何の状、二尺下は如何の状と、逐一報告すべければ其まで待たれたらばと云ふ。此も止むことを得ざるべし。張鴻文氏年六十一、来り曰ふ、西北十五里、孝民屯にも亀甲獸骨を産する事多し。前二地と共に洹河の沿岸に在り、但該地は今土匪の頭目二人盤踞す。一は張淮と云ひ、一は大金保と云ふ、共に甚だ獍猛なり。之に備へんが為、今県令を発して、土地八十畝地を有するものは銃一丁を、土地百五十畝地を有するものは二丁を備へしむ。斯かる状態にて附近のもの難を避けて城裡に入り来るもの日に多し。（諸橋轍次「旅枕」一九三八年^①）

諸橋のこの紀行文が、これまで殷墟考古学・甲骨学史の議論において利用された例を、筆者は寡聞にして知らない。文中に登場する殷墟周辺の小地名は、この地で詳細な考古学的調査が進んだ現今の現地情報との対比が可能であり、また殷墟の地が兵乱や匪賊による被害を受けて、当時きわめて不安定な状況下にあつたことを知ることができる。そして何よりも興味深いのは、諸橋が繰り返しこの地を訪れた理由として、現地での発掘を目指していたためであったことが、ここに明示されている点である。

この当時、林・諸橋のほかにも、在野の考古学者として名高い公爵大山柏が、一九二二年に殷墟の発掘を目指していた。^② 林・諸橋に加え、大山の発掘計画も実現を見ることはなかったとされるが、以上からは、大正時代に多くの日

本人研究者たちが、殷墟にあこがれ、発掘によって殷墟甲骨の出土を明らかにすることを目指すという、ある種の「殷墟ブーム」が起きていたことが判明するのである。⁽³³⁾

(4) パトロンの誕生——侯爵細川護立

諸橋はまた、二度目・三度目の殷墟行について、さらに次のような興味深い記述を残している。

大正八（一九一九）年から十（一九二二）年まで、私（諸橋）は支那留学をすることになった。その時浩卿（林泰輔）は又手紙をよこして、幸い細川（護立）侯爵が若干の研究費を出すことになったので、自分はどう一度安陽の調査をしてみたい、それについては、前以てかの地の最近の情報をお願いから、私に実地調査をしてくれ、ということであった。その頃はもはや私も若干支那語もできて、旅行がさほど苦しくなかったから、大正九（一九二〇）年（四月）、かの地に出かけてみた。然しこの時はやはり、河南省の飢饉とからんで、土匪が城外に横行し、彰徳（現安陽）城内は土匪の首領牛という者が治安の実権を握っておった、という時であったので、数度出土の場所には遊んだが、余り多く得る所はなかった。そこで大正十（一九二二）年（七月）に又出かけた。いよいよ（安陽）県知事（羅榮褒）との話合いもついて、それでは實際浩卿（林）を迎えて、大げさの発掘を試みようか、と吟味したのであるが、今度は又学生の排日運動が熾烈になって、ついにそのこともできずに終わったのである。（諸橋轍次「漢学界の回顧」一九五四年⁽³⁴⁾）

先の紀行文では一九二一年のこととされる諸橋の二度目の殷墟行が、ここでは一九二〇年とされており、どちらが正しいのか判然としない。しかし、諸橋が前後して三度殷墟を訪れた一九一八年から一九二一年までの三年間におい

て、この地が特に不安定な情勢下にあつたことが改めて確認され、日本人研究者がつかみかけた殷墟発掘の好機を失つた原因が、当時の殷墟を取り巻く現実の社会環境にあつたことが推測される。

そして何より見落とすことができない点は、問題の二度目と三度目の諸橋による殷墟行が、東京の林からの依頼によるものであり、さらにその前提として、細川侯爵、すなわち旧熊本藩主細川家の当主、侯爵細川護立による、林に対する研究助成の申し出があつたという事実である。この点をめぐつては、美術コレクターであつた細川が関係者の座談会で語つた話に、以下のような内容を見出すことができ、それが真実であつたことが確認できる。

外国の学者の西域探検といふものに……非常な興味を感じて居る時に、支那の彰徳〔現安陽〕から殷代の遺物が発見されたのであります。殷墟と言はれて居る所から亀甲獣骨が発掘されまして、是亦非常なセンセーションを学界に起したのであります。そこで、私は及ばずながらこの殷墟の発掘といふことを日本の手でやったら宜からうと考え、大正の三（一九一四）年でありましたか、日本で一番殷墟に付て詳しい学者、当時はまだ高等師範学校でありましたが、その先生の林泰輔さんといふ方が、最も殷墟に付て深い知識を持つて居られることが分つたのであります。……さうして宇野〔哲人〕博士と林さんと私との三人で色々其事に就て話を致しました処が、林さんは非常な意気込で、この老躯を提げて殷墟に行き、発掘に従事するといふ決心を話されたのであります。而して色々な疑問を明かにして学界に貢献したいと仰っしゃるので、私もそれは大変宜いことであると賛成をし及ぶ限りのお世話をする運びになり、林さんは、勇躍渡支されることに決まりましたが、不幸にして当時は非常に排日の盛んな時でありました為め、遂にこの壮挙が実現しなかつたのであります。（細川護立「清賞会第六回例会座談会記録」一九四〇年）⁽⁵⁶⁾

細川の助成による林の発掘は、以下に見るように一九二二年秋に予定されていたという。

大正八（一九一九）年三月……細川〔護立〕侯が大に此事に興味を懐かれ、若し林〔泰輔〕博士が再び殷墟に往き、更に発掘するやうな事があるならば、物質的に援助しても宜いと云ふことであつた。それから君〔林〕は……細川侯を訪ひ、色々交渉の結果、遂に細川家の人二名と共に支那に入り、更に大に研究の途を開かうとしたのである。所が支那では其後間もなく排日運動が勃発して如何にも危険に感ぜらるるやうになつたのである。そこで君〔林〕は追つて適當なる時機を見計つて目的を達しようと考へたのである。それから丁度三たび裘葛を更へて大正十一（一九二二）年……四月七日を以て易簣されたのである。実に惜いことであつた。聞く所によれば君〔林〕は大正十一年の秋、再び殷墟に往き、発掘をなすべき計画を立てて居られたと云ふことである。（井上哲次郎「『支那上代之研究』序」一九三二年）

これは先に見た諸橋の記述とも一致する。現地情勢の不安定さにより、繰り返し延期が図られ、一九二二年こそはという思いであつたところに、同年四月、林が急逝し、計画そのものが立ち消えになつてしまつたのである。

(5) 小結

一九二二年の細川護立の助成、林の主導による殷墟発掘計画は、現地の政情不安、社会情勢、対日感情の悪化などの諸条件に加え、林の急逝により、こうして実現することのないまま終わつた。

しかし、白鳥の「堯舜禹抹殺説」への反発を端緒とする林の長年にわたる殷墟への執念、そしてそれを現地で支えた諸橋の働きは、結果的に細川を「東亜考古学」のパトロンへの道に導いていくことになる。次章で述べるように、

殷墟をめぐる日中関係

細川はその後、東京帝大の原田淑人による植民地朝鮮での考古学事業を助成し、やがて日本人研究者による中国大陸各地での発掘を支える存在になっていくのである。そこにさらに、東亜考古学を国際事業として位置付け推進した日本外務省の思惑と、中国側の学術界の状況が、日中関係を主軸とする国際環境の変化の中で、複合的に作用する。こうして殷墟を取り巻くようにして生成された磁場が、多くの人々を巻き込みながら、民国学術史の中に殷墟発掘へと向かう一つの流れを形作っていくのである。

(以下、続篇)

【註】

- (1) その一例として、胡厚宣『殷墟発掘』上海：学習生活出版社、一九五五年がある。
- (2) 王汎森・杜正勝編『傅斯年文物資料選輯』台北：傅斯年先生百齡紀念籌備会、一九九五年、王汎森「説『傅斯年档案』札記」、『当代』一一六、台北：合志文化事業公司、一九九五年（後に王汎森『中国近代思想与学術的系譜』台北：聯經出版事業股份有限公司、二〇〇三年に再収録）、王汎森「什麼可以成爲歷史証拠——近代中国新旧史料觀點的衝突」、『新史学』八一二、台北：新史学雜誌社、一九九七年（同前）、杜正勝「無中生有的志業——傅斯年的史学革命与史語所的創立」、『古今論衡』一、台北：中央研究院歷史語言研究所、一九九八年、杜正勝・王汎森主編『新学術之路』中央研究院歷史語言研究所、一九九八年、杜正勝「新史学与中国考古学的発現」、『中央研究院歷史語言研究所傅斯年漢学講座一九九七——考古、文明与歴史』中央研究院歷史語言研究所、一九九九年、および Wang Fansen, *Fu Ssu-nien: A Life in Chinese History and Politics*. Cambridge: Cambridge University Press, 2000 頁々。
- (3) 拙文「東亜考古学と近代中国」、『岩波講座「帝国」日本の学知』三、東京：岩波書店、二〇〇六年、拙文「日本東亜考古学之形成与中国近现代学術之興起」、『東亜歴史上の天下与中国概念』、台北：国立台湾大学出版中心、二〇〇七年、および竹元規人「近现代中国における考古学の命運——歴史をめぐる「伝統」と「近代」高柳信夫編『中国における「近代知」の生成』東京：東方書店、二〇〇七年。
- (4) 陳洪波『中国科学考古学的興起——一九二八—一九四九年歴史語言研究所考古史』桂林：广西師範大学出版社、二〇一一年。この

他、関係者の親族による評伝的著作として、李光謨『從清華園到史語所——李濟治学生涯瑣記』北京：清華大学出版社、二〇〇四年がある。

- (5) 陳星燦『中国史前考古学史研究』北京：三聯書店、一九九七年（北京：社会科学出版社、二〇〇七年再刊）、陳星燦『二十世紀中国考古学史研究論叢』北京：文物出版社、二〇〇九年、および徐堅『暗流——一九四九年前安陽之外的中国考古学伝統』北京：科学出版社、二〇一二年。
- (6) 李曉東『中国文物学概論』石家莊：河北人民出版社、一九九三年。
- (7) 蔡鳳書『中日考古学的歷程』濟南：齊魯書社、二〇〇五年、および史勇『中国近代文物事業簡史』蘭州：甘肅人民出版社、二〇〇五年。
- (8) Falkenhausen, Lothar von, "On the Historiographical Orientation of Chinese Archaeology", *Antiquity*, Vol. 67, No. 257, Gloucester, Eng.: Antiquity Publications Ltd, 1993 (穴沢咏光訳「中国考古学の文献史学指向」『古文化談叢』三五、北九州：九州古文化研究会、一九九五年)。同時期の日本でも、岡村秀典「区系類型論とマルクス主義考古学」『考古学研究会編『展望考古学——考古学研究会四十周年記念論集』岡山：同研究会、一九九五年、および大貫静夫「中国における土器型式の研究史」『考古学雑誌』八二—四、東京：日本考古学会、一九九七年などの関連業績がある。その他、中国考古学史上において、民国期に改めて目を向け、史語所だけではなく北平研究院史学研究会に注目すべきだという問題提起として、拙文「近現代考古学」『月刊しにか』十一、東京：大修館書店、一九九七年がある。
- (9) Trigger, Bruce G., *A History of Archaeological Thought*, Cambridge, New York: Cambridge University Press, 1989.
- (10) 桑兵『東方考古学協会述論』『歴史研究』五、北京：中国社会科学雑誌社、二〇〇〇年（桑兵『晚清民国的国学研究』上海：上海古籍出版社、二〇〇一年に再収録、中西裕樹訳「東方考古学協会について」狭間直樹編『西洋近代文明と中華世界』京都：京都大学学術出版会、二〇〇一年所収）、および李孝遷『西方史学理論の初期引介』『西方史学在中国的傳播』一八八二—一九四九』上海：華東師範大学出版社、二〇〇七年。
- (11) その一例として、馬亮寬『傅斯年社会政治活動与思想研究』北京：中国社会科学出版社、二〇〇九年がある。
- (12) 前掲註4陳洪波『中国科学考古学的興起』。

殷墟をめぐる日中関係

- (13) 小林知生「東亜考古学会初期の頃」東方考古学叢刊甲種刊行会編『東亜考古学会懐古』東京・雄山閣、一九八二年（復刻版『東方考古学叢刊甲種』附録。本文献について、坂詰秀一氏から御教示、寄贈を受けたことを、ここに感謝申し上げます）。
- (14) 坂詰秀一「日本考古学史拾遺——東亜考古学会、東方考古学協会と日本古代文化学会」『立正大学文学部論叢』九九、東京・同大学、一九九四年、坂詰秀一『太平洋戦争と考古学』東京・吉川弘文館、一九九七年、大貫静夫「原田淑人と東洋考古学」東京大学編『精神のエクスペディション』東京・東京大学出版会、一九九七年、酒寄雅志編『東亜考古学会と近代日本の東アジア史研究（平成十六年度）平成十八年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書』栃木・国学院大学栃木短期大学日本史第一研究室、二〇〇七年、および森本和男「文化財の社会史——近現代史と伝統文化の変遷」東京・彩流社、二〇一〇年（本文献の存在について、大貫静夫氏から御教示を受けたことを、ここに感謝申し上げます）。
- (15) 松丸道雄「日本甲骨学事始め」『歴史と地理』五二六、東京・山川出版社、一九九九年、および成家徹郎「日本人の甲骨研究——先駆者富岡謙蔵と林泰輔」『古代漢字の研究』東京・大東文化大学人文科学研究所、二〇〇五年。
- (16) 徐蘇斌「日本对中国城市与建築的研究」北京・中国水利水电出版社、一九九九年。
- (17) 前掲註4陳洪波「中国科学考古学的興起」。
- (18) 拙文「近代中国と文物事業——広州とその周辺を例として」松丸道雄編『論集 中国古代の文字と文化』東京・汲古書院、一九九九年、拙文「近代中国とアカデミー」『人文科学年報』三二、川崎・専修大学人文科学研究所、二〇〇二年ほか。
- (19) 前掲註3拙文「東亜考古学と近代中国」。
- (20) 前掲註3拙文「日本東亜考古学之形成与中国近現代学術之興起」。
- (21) 拙文「近代日本学者与殷墟考古」『紀念殷墟発掘八十周年学術研討会論文集』台北・中央研究院歴史語言研究所、二〇〇八年。
- (22) 拙文「傅斯年与日本学者——在国际学術競争中的考古事業」王志剛・馬亮寬主編『傅斯年学術思想的傳統与現代』研討会論文集』天津・天津人民出版社、二〇一一年。
- (23) 王汎森ほか主編『傅斯年遺札』台北・中央研究院歴史語言研究所、二〇一一年。本史料集には傅斯年自身の書簡原稿と傅斯年宛ての書簡が収録されているが、史語所檔案中にはそれらと個別に密接な関係を持つ他の檔案（機関宛、他の所員宛）が数多く含まれているにもかかわらず、それらそのもの、およびその点に言及した注記などは掲載されていないため、書簡を取り巻く複雑なやり取り

の本当の姿は、本史料集だけからは見えてこない。本論文の後半において筆者は、殷墟発掘と日本との関係を軸に、膨大な档案群から見出した史料を用い、複雑に絡み合った関係を一つ一つ解きほぐしながら、議論を展開する予定である。

(24) 前掲註15松丸道雄「日本甲骨学事始め」。

(25) 無記名「評議員会」講演会『東洋時報』一三〇、東京・東洋協会、一九〇九年七月。白鳥の疑古思想とその影響については、貝塚茂樹「東洋学の命運」『玄想』二一一、丹波市・養徳社、一九四八年（後に貝塚茂樹『貝塚茂樹著作集』七、東京・中央公論社、一九七七年に再収録）、五井直弘『近代日本と東洋史学』東京・青木書店、一九七六年、および小路田泰直『邪馬台国』と日本人』東京・平凡社、二〇〇一年を参照。

(26) 和田清『岩波講座 東洋思潮 支那(上)』東京・岩波書店、一九三六年。和田は白鳥の後、東京帝大文科東洋史講座の教授となつた。

(27) 原田淑人等(談)「東亜考古学の座談会 二」『考古学』六一四、東京・東京考古学会、一九三五年。原田は東京帝大文学部考古学講座の初代教授である。原田その人については、前掲註14大貫静夫「原田淑人と東洋考古学」を参照。

(28) 駒井和愛「殷虚文化私考」『歴史教育』四、東京・四海書房、一九三六年（後に駒井和愛『中国考古論叢』東京・慶友社、一九七四年に再収録）。駒井は東京大学文学部考古学講座の第二代教授である。

(29) 西嶋定生「貝塚さんとその著作集」貝塚茂樹『貝塚茂樹著作集』十(月報)、東京・中央公論社、一九七八年(本文献の存在について、松丸道雄氏から御教示を受けたことを、ここに感謝申し上げる)。この中で西嶋が回顧する貝塚の講演会は、無記名「第十七回東方文化学院講演記事」(『史学雑誌』五四―八、東京・史学会、一九四三年)の記事によれば、具体的日付は昭和十八(一九四三年)五月十九日で、講演題目は「支那古代世界の成立」であつたことが判明する。

(30) 和田清「夏朝は果して実在したか」『日本学士院紀要』東京・日本学士院、一九五二年。

(31) ラクペリー学説については、石川禎浩「二十世紀初頭の中国における「黄帝」熱——排満、肖像、西方起源説」『二十世紀研究』三、京都・京都大学学術出版会、二〇〇二年、楊思信「拉克伯里的「中国文化西來說」及其在近代中国的反響」『中華文化論壇』二、成都・四川省社会科学院、二〇〇三年、孫江「連続と断絶——二十世紀初期中国の歴史教科書における黄帝叙述」『中国研究月報』六二―十、東京・中国研究所、二〇〇八年(後に並木頼寿等編『近代中国、教科書と日本』東京・研文出版、二〇一〇年に再収録)、李帆「人種

与文明——拉克伯里(Terrien de Lacouperie)学説伝入中国後の若干問題』『西南民族大学学报(人文社会科学版)』二、成都：西南民族大学、二〇〇八年、拙文「苗族史の近代——漢族西來說と多民族史観」、『北海道大学文学研究紀要』一二四、札幌：同研究科、二〇〇八年、孫江「黄帝はバビロンより来たり——ラクーペリ「中国文明西來說」および東アジアへの伝播 その一」、『静岡文化芸術大学研究紀要』十一、浜松：同大学、二〇一〇年を参照。

(32) 前掲註31拙文「苗族史の近代——漢族西來說と多民族史観」の註21を参照。

(33) 「漢族(中国文明)西來說について言えば、実際のところ、和田清は一九三〇年段階ですでにそれを放棄していたと見られる。一九三〇年の草稿とされる和田清「歴史上より見たる支那民族の発展(昭和五年九月十五日稿)」(『東洋史講座』十三、東京：雄山閣、一九四一年所収)に、「支那民族とは果して何か、といふ問題は非常に重要な面白いことには相違ありませんが、同時に非常に厄介な難問であります。支那人が埃及もしくは西南亜細亜、バビロニアの方面からでも来たらうといふやうな説は、今日では殆ど問題になりません。今のところ、支那人は優勝の新亜細亜民族で、大陸の東北隅もしくは東南辺に居ります各種の旧亜細亜人種とは大分違ふらしいといふ位より外、それ以上、支那民族が果して如何なるもので、何時頃何処からやつて来たかといふやうな問題は、未だ能く解つてゐないのであります。今はさういふ難問は略して、ただ現在から約三千年位前に、支那人が今の黄河の中流域に勃興したものであるとして、御談を進めます。それも先秦時代のこと余り確なことは申せませんが、大体殷とか周とか云はれた時代に当る頃に、最初は未だ黄河の中流域、恐らく今の長安洛陽から鄭州にかけての地方にのみ少々だけ、後の所謂中原地方も大抵は皆殺伐な戎狄蛮夷の割拠に任せ、その河添ひの平野にだけ稍々文明な農耕生活を営んでゐた漢民族(支那人)が、やがて次第に発展して、黄河の下流域に伸びて南北に拡がり、汾水の流域を溯つて山西方面に入り、渭水流域から南に下つて漢水流域・巴蜀の方面にまで伸展して行つた、といふ位のこと事実はどうと思はれます」とあることが注目に値する。

実は「疑古」の張本人である白鳥もまた、晩年には中国上古史についての自説を修正するの必要を感じていたと見られる。一九二五年の白鳥の退官に際した最終講義での発言が、末松保和によつて以下のように記録されている。「先生の講義『漢魏時代の西域史』の最後の時間が来た。……時間のはじめ先生は、前週の続きを少し話されて、しめくりをつけられてから、別れの言葉を述べられた。……私の記憶によれば、先生の話には二つの要点があった。その一つは「自分(先生)は、一つの考えがまとまれば、すぐにそれを発表し、それとちがった考えが浮べば、またすぐにそれを発表して来た、だから自分の説を知ろうとする人は、その問題についての

自分の最近の論文を読んでくれればそれでよい」ということであった。先生はそう言われたあと言葉をついで、……はじめるころ自分は、中国の古伝説における堯舜についての考えをのべたが、二十年後の今日、大学を去るときの自分が、同じ問題について、いかに考えているかを諸君に話しておくことは意味があるろう、といって堯舜論をされた。おはずかしいことであるが、このとき聴いた堯舜論が、二十年前の堯舜論と、いかに変り、いかに発展したものであったか、無学の私にはわからなかった（末松保和「白鳥先生の最終講義のことなど」、『白鳥庫吉全集・月報』三、東京：岩波書店、一九七〇年）。

大正から昭和初年にかけてのこうした「疑古」論調変化の背景の一つとして、東洋学界における「漢族（中国文明）西来」説の衰退があったことが推測される。「漢族（中国文明）西来」説 およびそれと対になった「苗族先住」説の消長については、前掲註31拙文「苗族史の近代」を参照。

(34) 一九〇八年に京都で初めて殷墟甲骨の研究に着手したとされる京都帝大文科大学講師富岡謙蔵については、神田喜一郎「支那学者富岡桃華先生」、『敦煌学五十年』東京：二玄社、一九六〇年、および前掲註15成家徹郎「日本人の甲骨研究」を参照。

(35) 内藤虎次郎「支那古典学の研究法に就きて」、『東方時論』二二二、東京：東方時論社、一九一七年（筆者未見、後に内藤虎次郎『内藤湖南全集』七、東京：筑摩書房、一九七〇年に再収録）。文中で言及される「二層遡つた時代、即ち殷墟以上の古蹟」、「銅器の全く出ない古蹟」について、内藤は「殷虚に就て」（『考古学雑誌』十二一、東京：考古学会、一九二二年（後に内藤虎次郎『内藤湖南全集』八、東京：筑摩書房、一九六九年に再収録）という別の論文の中で、盤庚以前の殷代の遺跡と夏代の遺跡が、それぞれ河南帰徳府（現商丘）および山東濰県附近にあると推論しており、注目される。

(36) 内藤が「漢族（中国文明）西来」説に与さなかったことは、必ずしも「疑古」でなかったことを意味しない。内藤が白鳥と同じく、古典に見える中国上古史像を後の時期の虚構であると疑っていたことについては、内藤虎次郎『尚書編次考』、『支那学』一一七、京都：弘文堂書房、一九二一年および「禹貢製作の時代」、『東亜経済研究』六一、山口：東亜経済研究会、一九二二年（ともに前掲註35内藤虎次郎『内藤湖南全集』七に再収録）、錢婉約『辨章學術 考鏡源流——内藤湖南与近代中国學術的関係』、『内藤湖南研究』北京：中華書局、二〇〇四年を参照。

(37) 前掲註35内藤虎次郎「支那古典学の研究法に就きて」。

(38) 同前。

殷墟をめぐる日中関係

- (39) 京都帝大への濱田の招聘と考古学研究室の創設については、前掲註3拙文「東亜考古学と近代中国」および「日本東亜考古学之形成与中国近现代学术之興起」を参照。濱田は後に京都帝大の考古学講座の初代教授となる。
- (40) 濱田耕作「内藤博士のピストル」『新生』一—三、不詳、一九二六年（筆者未見、後に濱田耕作「青陵隨筆」東京・座右宝刊行会、一九四七年に再収録）。ただし、濱田がその後も、現実には「漢族（中国文明）西来」説を信奉し、内藤とは幾分異なる中国上古史観を持ち続けていた点については、本文中で紹介した原田らとの座談会での「仰留時代の彩色土器は、形も西の方の国の製法であるし、模様もさうであると思ふ」（前掲註27原田淑人等「談」）「東亜考古学の座談会（二）」という発言によって明らかである。
- (41) 林については、神田喜一郎「貝塚教授の『甲骨文字』図版篇を手にして林泰輔博士を憶ふ」前掲註34『敦煌学五十年』所収、町田三郎「林泰輔と日本漢学」『明治の漢学者たち』東京・研文出版、一九九八年、および前掲註15成家徹郎「日本人の甲骨研究」を参照。
- (42) 白鳥については、前掲註25五井直弘「近代日本と東洋史学」を参照。
- (43) 林泰輔「清国河南省湯陰県発見の亀甲牛骨に就きて」『史学雑誌』二十一—八—十、東京・史学会、一九〇九年八月—十月（後に林泰輔『支那上代之研究』東京・光風館書店、一九二七年に再収録）。
- (44) 林泰輔「堯舜禹の抹殺論に就て」『東亜之光』一—一、東京・学海指針社、一九一一年（同前）。
- (45) 林泰輔「殷墟の遺物研究に就て」『東亜之光』十四—五—七・八、東京・東亜協会、一九一九年（同前）。
- (46) 前掲註15成家徹郎「日本人の甲骨研究」。
- (47) 諸橋轍次「中国旅行と中国留学（一）」『諸橋轍次著作集』六（月報）、東京・大修館書店、一九七六年。
- (48) 諸橋轍次「旅枕」『遊支雜筆』東京・目黒書店、一九三八年（後に諸橋轍次『諸橋轍次著作集』九、東京・大修館書店、一九七五年に再収録）。
- (49) 諸橋轍次「漢学界の回顧（六）」『漢文教室』十一、東京・大修館書店、一九五四年（後に諸橋轍次『諸橋轍次著作集』十、大修館書店、一九七七年に再収録）。
- (50) 無記名「年譜」前掲註49諸橋轍次『諸橋轍次著作集』十所収。
- (51) 前掲註48諸橋轍次「旅枕」。
- (52) 梅原未治「考古学六十年」東京・平凡社、一九七三年。梅原は京都大学文学部考古学講座の第二代教授である。

- (53) さらに渡瀬二郎なる人物が、「河南彰徳府ニテ」得たとされる四十片余りの殷墟甲骨を、一九一六年六月に東京帝大に寄贈していることが注目に値する（東大文学部考古学研究室現蔵、渡瀬の名刺二枚と裏書き現存）。日本国内に現存する史料の中には、元陸軍砲兵中尉の渡瀬二郎が、一九一五年十二月段階で、中華民国によって陸軍部済南駐在辦事員として任用され、殷墟から遠からざる山東省済南市に駐在していたことを示すものがある（外務省政務局編『支那傭聘本邦人名表（大正四年十二月現在）』同局、一九一五年（外務省外交史料館蔵、アジア歴史資料センター（<http://www.jacar.go.jp/>）B02130228400））。その前年一九一四年十二月段階の史料にはその名を確認できず（外務省政務局編『支那傭聘本邦人名表（大正三年十二月現在）』同局、一九一六年（外務省外交史料館蔵、アジア歴史資料センターB02130228300））、この渡瀬なる人物の山東着任は一九一五年のことであったと推測される。先に本文中で紹介した諸橋轍次の記述に見るように、民国初年当時の殷墟周辺は、兵乱の続く軍閥争奪の地であった。この渡瀬が、外国人「お雇い」武官として当地を訪れ、殷墟甲骨を入手したと推測するのは、不可能なことではない。なお、本甲骨そのものについては、松丸道雄「日本散見甲骨文字蒐集（一）」『甲骨学』七、東京：日本甲骨学会、一九五九年において、すでに紹介がなされている。
- (54) 前掲註49諸橋轍次「漢学界の回顧（六）」。
- (55) 諸橋の回顧に繰り返し現れる「飢饉」は、一九一九年六月以来十五ヶ月間この地に続いた日照りもたらした不作を反映すると推測される。一九二一年三月には、この地の農民の領袖が貧民を率いて「殺富濟貧」を掲げ、大規模な蜂起を行なったという。一方、「排日」については、学生連合会が一九二〇年一月に日本製品を燃やす示威運動を行なったことが知られている（安陽県志編纂委員会編『大事記』『兵事』『安陽県志』北京：中国青年出版社、一九九〇年）。これらの事実は、諸橋の記述とも符合する。
- (56) 細川護立ほか（談）『座談紀録』昭和十五年十一月二十九日清賞会第六回例会、『季刊永青文庫』八・九・十、東京：永青文庫、一九八三年（後に「漢の銅盤を繞つて」と改題されて、細川護熙編『美に生きた細川護立の眼』東京：求龍堂、二〇一〇年に再収録）。
- (57) 井上哲次郎「『支那上代之研究』序」前掲註43林泰輔『支那上代之研究』所収。